

友誼の聲

THE VOICE OF FRIENDSHIP

2011年12月
第86号
日本語版

イエズス会中国センター
Tokyo Jesuit China Center
東京都台東区下谷 1-5-9 「上野教会方」
Tel : 03-3842-4407 Fax : 03-3842-4408
E-mail : jccstaff@yo.rim.or.jp
http://www.sjchina-japan.org

幼子イエスのおむつ

降誕際おめでとうございます。そして皆様が恵みに満ちた新年を迎えられますように。

「天よ、露を滴らせよ。雲よ、正義を注げ。地が開いて、救いが実を結ぶように。恵みの御業が共に芽生えるように。わたしは主、それを創造する。」
(イザヤ 45:8)

これは、イエス・キリストが生まれるおよそ500年前、外国にとらわれの身となっていたイスラエル人が、憧れと希望で歌っていた祈りです。イエスの誕生によって、この祈りは見事にかなえられました。しかし、かなえられたとはいえ、実現までに500年、およそ17世代を経なければなりません。まさに、

「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」(ペトロ 3:8)

【1年を振り返って】

中国センターにとって、今年のクリスマスは楽しいでしょうか? こう自問すると、その当時のイスラエル人のような希望を与えられなければ、世間の常識だけで見ればあまり楽しくないと答えることになります。

終わろうとしているこの一年を振り返ると、ちょうど一年前、合同降誕祭のミサでの歌声の響きが、いまだ耳から消えていない12月27日、主任司祭の岩橋純一神父様が、ちょっとした事故で首の頸椎を強く打ち、緊急入院し、全身麻痺状態となって、呼吸さえ困難になりました。最近では入院先で自ら呼吸ができる時間も増え、近いうちに本格的なリハビリに入ることができると予想されます。岩橋神父様の入院後、隣の浅草教会の西川哲彌神父様が上野教会の主任を兼ねるように任命され、快く上野教会とセンターの信者の司牧にあたってくださっています。

もう一つの悲しみは、全国の人々との共通の悲しみです。ですがそれは、3月11日に襲った東日本の震災、津波の犠牲者や家も仕事場を失った人々との連帯でもあります。早速援助金カンパをし、日曜日の共同祈願として司教団が配布した祈りを中国語で祈っています。

原発事故での放射能汚染を恐れて、春休み中の留学生や子供のいる家庭は、一時中国へ避難していきました。現在、大半は日本へ戻ってきています。

【多くの恩人】

去年のお正月の間、センターのおなじみの林桓神父様がローマから一週間滞在してくださり、信仰生活について信者の養成プログラムをしてくださいました。林桓神父様はパチカン放送局の中国語放送(電波およびインター

ネット)を担当している、シンガポール出身の朗らかな神父様です。

それから8月には、台湾出身の甘国棟神父様が来てくださり、3日間の霊性ゼミを指導してくださいました。来年早々には、以前センターに来ていただいた潘家駿神父様も台湾からおいでになり、元旦のごミサを司式してくださいさる予定です。潘家駿神父様は台湾の教会での典礼、



秘跡についての権威です。センターの指導能力は限られていますが、このような方々によって大いに助けられています。信者にとっても、ここにいながら世界の一流の指導者と接することができるのは、とてもありがたいことです。

【馬小屋の前で】

センターを訪ねてくる中国人信者の特徴の一つは、降誕祭に教会に置かれる馬小屋への信心だと思えます。無論、世界中の信者は、お生まれになったばかりのイエスの姿を見る馬小屋に魅力を感じるのですが、長く馬小屋の前で祈る中国人信者には感銘を受けます。そして、馬小屋に寄付を残さなければ落ち着かないようです。寄付受け入れの箱を置かなければ、馬小屋がお金だらけになってしまいます。彼らは特にイエス、マリア、ヨセフの人間性に惹かれています。「おむつを取り替えてもらおうイエス」が好きなのです。

『友誼の聲』読者の方々に感謝を込めて、そして皆様の心にある希望が、降誕祭にあたって望みを大きく超えるほど実現されますよう祈り、ごミサをささげます。次の言葉を固く信じてください。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。」(ローマ 8:28)

恵み多い年をお迎えください。

ロバート・ディーターズ神父

お知らせ

主の降誕前夜祭

2011年12月24日(土)

16:30 ~ 19:20 赦しの秘跡
19:30 ~ クリスマス・キャロル
20:00 ~ 合同ミサ
ミサ後 パーティー

主の降誕

2011年12月25日(日)

10:30 ~ 11:50 赦しの秘跡
12:00 ~ ミサ(中国語)
ミサ後 パーティー(なべ料理、
ビンゴゲーム、踊りなど)

神の母聖マリア

2012年1月1日(日)

12:30 ~ 赦しの秘跡(潘家駿神父)
13:30 ~ ミサ(潘家駿神父)

黙想会

2012年1月8日(日) ~ 9日(月)

時間 11:30 ~ 17:00
指導司祭 林桓神父

春節祭

2012年1月22日(日)

10:30 ~ 11:50 赦しの秘跡
12:00 ~ ミサ
ミサ後 パーティー(食事・余興)



聖フランシスコ・ザビエルの終焉の地を訪ねて

以前から一度は行ってみたいと思っていた聖フランシスコ・ザビエル終焉の地、つまり中国の上川島に、やっとの思いが叶って、この秋行って見ることができました。イグナチオ教会ザビエル会主催の巡礼旅行に参加することができ、今年の11月15日より21日までの6泊7日の旅行で行ってきました。以下その巡礼旅行の際に感じたことを記したいと思います。

すでにご存知のように、聖フランシスコ・ザビエルは1549年日本に来て、鹿児島、平戸、山口などでイエスの教えを伝えてくださいました。日本の中心都市京都にも赴き、天皇や将軍にも福音を伝えると同時に、都での宣教の許可を得ようとしたが、時は正に戦国時代の終盤戦。天皇や将軍にはザビエルと会見する余裕も無く、ザビエルはほったらかし。これに失望したザビエルは再び重い足を引かずして山口に引き返しました。そのような時だったのではないかと思います。ザビエルは考えます。「日本に影響を与えるためには、まず先に中国をキリスト教化する必要がある」、と。この都行き失敗をもとに、ザビエルは真剣に中国布教を考え、1551年11月とうとう日本を後にし中国に向かいました。途中ゴア等を経て1552年3月、一人の中国人の案内と世話のもとに、やっと上川島にたどり着きました。が、その中国人も間もなく姿を消してしまい、ザビエルともう一人の若いイエズス会士は、あまり人もいない上川島に取り残されます。その時ザビエルは46歳。11年前にポルトガルを出発して以来、インド、東南アジア諸国、日本を渡り歩き、彼の身体はかなり疲労困憊していたのでしょう。そのうち疲労からくる体調不良に陥り、病気が併発して、とうとう同年12月3日主のもとに召されました。

私たちはその終焉の地を訪れるべく、7人のグループで11月15日羽田を発ちました。4時間の飛行の後香港に到着。そこからマカオ経由で中国本土に入りました。マカオでは現地参加の二人（一人は中国センター創立者の高神父）と一緒に、計9人の巡礼団となりました。その日のうちに上川島対岸の町（鎮）台山に移動し、そこで一泊。次の日私たちはいよいよ待ちに待った上川島に行ったのです。台山の港からフェリー（高速艇）で40～50分。距離にして10～20キロもあるでしょうか。『ザビエルが朝晩遠くに眺めた中国本土はかなりの距離のところにあるのだな』と実感しながら、フェリーの速度に身を任せました。上川島に到着したときには、現代の港の様子に驚きました。フェ



上川島のザビエル記念堂内に置かれた櫃

リーの行き来も一時間に3～4便の多きにいたっていました。上川島の港にはかなり大きな観光船も数台入っていました。聞くところによると、現在のの上川島は夏季の避暑地、遊興の島となっているようで、夏になると本土、大陸から沢山の人がこの島にやって来るそうです。時代が変われば小さな島も変わるものだなと、実感しました。更に驚いたことには、観光船が入る場所とは反対方向の港には、沢山の軍艦が停泊していました。後で現在のの上川島は軍の基地にもなっていると聞き、驚きました。上川島はそのような重要なところに位置しているのですね。

それはともかく、港からバスで10～15分程度で目的地のザビエル記念堂に着きました。少し小高い丘の上に、はるか遠くに存在する中国本土、大陸を望み見ることのように、きれいな記念堂が建っていました。心をとぎめかせながら、小走りに走って行きたかったのですが、聖ザビエルの終焉の地という厳粛な思いに圧倒され、ゆっくりゆっくり1歩1歩かみ締めながら近づかざるをえませんでした。40～50段の階段を経て、やっと中に入ると、少人数でミサがあげられるぐらいの空間があり、その真ん中にかかなり大きな石棺が置かれていたのには驚きました。聖ザビエルが息を引き取った後、そのような立派な石棺を使って埋葬されたという報告を聞いたことはありません。そのような立派な棺を準備し、その中に遺体を収めるような時間があったのでしょうか？ そのような立派な葬儀が可能だったのでしょうか？ 聞くところでは、海岸の砂地に一時的に遺体を埋めるような葬儀しかできなかったそうですけど...

その地で特に私が確かめたかったことは、その地から中国大陸がどのように見えるか、と言うことでした。フェリーで40～50分ぐらい離れたところですから、距離としてせいぜい10～20キロぐらいのものでしょう。天気が良い時には当然地平線の上のかなたにうっすらと大陸が見えるはず。その大陸がどのように見えるか？ ザビエルの目にどのように映ったか？ それを確かめたかったのですが、残念。その日は厚い雲が立ち込め、祈念堂周辺からは中国大陸はとて望めませんでした。上川島の北半分は、正面北方台山の町に入る大きな入り江の入り口付近に位置しています。ですから北を見れば中国大陸の台山の町が見え、左右を見れば入り江の両端の町が見えるはず。ところが、台山の町はおろか右左の地平さえ、

その日は見ませんでした。しかしザビエルがここに滞在していたときには必ず見えたはず。自分がこれから行くべき大陸の地。それを雲間に見て、どのように思ったことでしょうか。上川島に来た当初の健康な時の希望（野心？）一杯の思いは別としても、身体的衰弱が進み、もうあの地に行くのは無理だと感じ始めてからの思いは、どのようなものだったのでしょうか。私はそのザビエルの思いを感じたく、祈念堂下の階段の踊り場付近から何度も遠くを望んだのですが、残念ながら大陸は見えませんでした。見えたのはただ厚い雲だけ。

私たちはその祈念堂に1時間もいましたでしょうか。容赦なく時間が流れ、予定の時間が来ましたので、ザビエル聖人にくさようなら。この地まで来させてくださったこと、心から感謝します。>と心の中で言いながら、失礼しました。その晩は対岸の台山のホテルで一泊し、次の日は華僑の御殿の町、開平を見学しました。次の日、マテオ・リッチ（利瑪竇）が中国に到着以来5～6年過ごした町、肇慶に行きました。そこでマテオ・リッチの功績をつぶさに見ることができましたが、観光の対象としての一般の公開にはまだまだ努力が必要な印象を受けました。その後私たちは広州に移動し、そこで司教座聖堂のミサに参加したり、ホテル近くの教会で信者さん方との交流をしたり、有意義な旅行をすることができました。感謝。

最後に、今回の巡礼『聖フランシスコ・ザビエル終焉の地を訪ねて』に参加させていただき、二つの有意義な点に感謝したいと思います。一つはもちろん聖フランシスコ・ザビエルの思いを自分なりに体感できたことです。特に、死を前にして最後の目標であった中国を目の前にし、すべて神様のご決定に従わなければならないとの悟りです。この悟りは我々一人ひとりにとっても最も大切な悟りでしょう。聖人のその思いがどのようなものであったのか、今回の巡礼旅行で少し感じられたような気がします。二つ目は中国本土で信仰を同じくする信徒の方々、神父様方と交流できたことです。政治的圧力で不自由な信仰生活を強いられているにもかかわらず、勇気をもって信仰生活をなさっていらっしゃる姿に感動いたしました。今後も何らかの機会を得て、お互い交流できることを祈ってきたいと思います。

2011年12月8日

井上 潔神父



ザビエル記念堂



ザビエルが望んだ中国本土方面の海
(晴れる日に中国本土が見えるはず)